

# 同じ地球に生きる仲間たち

樋川 恭子

横浜市立金沢高等学校

担当教科：英語

実践教科：異文化理解クラブ

時間数：18 時間

対象学年：1,2 年生

対象人数：13 名

## カリキュラム

### <実践の目的>

- ・ 様々な活動を通して、自分と世界のつながりに気づき、自分たちとは異なった生活をしている人々の生活の様子を、「どこか遠い国の話」ではなく、同じ地球に生きる仲間として感じるようになる手助けをする。
- ・ 異文化を理解するために、どのような姿勢を持つべきかを考える。
- ・ 国際協力のために、自分たちがどのようなことができるかを考える。
- ・ 日本語だけでなく、英語で自分の考えを表現できるようになる。

## 授業の構成

以下の授業（活動）以外にも、週に1度、英語での表現活動をしている。

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材等
1	JICA 横浜へ行って、世界を知ろう  ねらい：世界にはどのような国があり、なぜ援助が必要なのかを考える	(1) 世界には、いくつかの国があるか (2) 食べ物を通して日本と世界のつながりを知る (3) JICA の活動とその意義 (4) 資料館見学	プリント(ワークシート)
2	世界が100人の村だったら  ねらい： 体験型ワークショップに参加し、 ・世界の現状と課題を知る ・地球市民としての感覚を共有する ・課題解決に向けて、自分がすべきことを考える	(1) アイスブレイキングゲーム(世界の国々を知る) (2) 紐や紙コップを使って、世界の現状と課題を知る (3) 「世界が100人の村だったら」朗読 (4) まとめ	紙コップ、紐
3	未来に向けて、私にできること  ねらい： 地域社会のことから、グローバルなことまで、様々な課題の解決方法を考える	(1) 課題が書いてある、ワークシートを配り、個人で記入 (2) 同じ課題のワークシートを持っている人で、小グループになる (3) 各グループで課題の解決方法について討議する(ダイヤモンドランキング) (4) 討議結果を発表する	ワークシート
4	Stop Human Trafficking タイ、パヤオセンターの子供たちとの交流	(1) タイの現状を劇によって子供たちが発表 (2) グループでの話し合い	特になし *使用言語：タイ

	ねらい: タイの子供たちを取り巻く人身売買、性的搾取の問題とその問題への取り組みについて考える。	(3) 各グループによる発表	語、日本語、英語
5	世界の子供たちを知ろう ねらい: 発展途上国の子供たちが抱える問題を学び、私たちに何ができるかを考える	(1) UNICEF ハウスの展示を見学し、紛争や不衛生がどのように子供たちに影響するかを学ぶ (2) UNICEF が取り組んでいる活動について学ぶ (3) 質疑応答	特になし
6	カンボジアの現状と私たちにできること ねらい: カンボジアの現状と私たちの関わり、その問題への取り組みについて考える	(1) カンボジアで「かものはしプロジェクト」を立ち上げ、人身売買を防ぐために、大人に職業訓練と仕事を提供している村田早耶香さんから話を聞く (2) 自分たちが何ができるかを考える (3) 質疑応答	特になし
7	アフリカの仲間たち ねらい: アフリカと私たちの繋がりを知り、世界の各地で起きている事柄は私たちと関係していることを学ぶ	(1) アイスプレイングゲーム (Win&Win「対立と協力」の姿勢を学ぶ) (2) フォトランゲージ 自分と共通点がある写真を選ぶ (3) 写真の国を地図で探す (4) 写真に写っていた人々が書いたメッセージを読む (5) 物ランゲージ 自分が気になる物をえらび、つながりを知る (6) 感想を発表	アフリカやその他世界各国の物品、青年海外協力隊員が撮影したアフリカの写真
8	カンボジアの友達を作ろう ねらい: カンボジアの高校生に手紙を書くことによって、カンボジアの人々と、個人的なつながりを作る	(1) カンボジアのイメージ(ステレオタイプ)についてそれぞれが書く (2) カンボジアの高校生に自己紹介を兼ねた手紙を書く (3) カンボジアについてもっているイメージを書き、発表する(ステレオタイプ)	生徒それぞれの写真と便箋、ワークシート
9	裁判員制度について学ぼう ねらい: 日本の裁判員制度とアメリカの陪審員制度の違いを学び、制度の利点と欠点を考える	(1) フォトランゲージ(陪審員制度の写真を見て何かを考える) (2) 日本とアメリカの制度の違いを学ぶ (3) 裁判員制度に賛成、反対に分かれ、意見を発表する(ミニディベート)	アメリカの陪審員制度に関する絵  * 使用言語: 英語、日本語

10	JICA 地球ひろばへ行って世界を知ろう ねらい: 水をテーマに、発展途上国が抱える問題を学ぶ	(1) 展示を見学し、水をめぐる世界の問題を考える (2) 青年海外協力隊 OB から、実際のアフリカが抱える問題について学ぶ (3) 映画「ショコラ」を見て、アフリカの子供たちが抱える問題について考える	特になし
11	横浜国際フェスタ見学 ねらい: 世界の文化や、日本との関わりを学ぶ	(1) 展示を見学し、異文化に触れる (2) NGO、大学、高校等がどのような活動をしているかを知る (3) 世界の食文化を体験する (4) 文化祭でどのような展示をするかを考える	特になし
12	文化祭展示 ねらい: 文化祭で、今まで学んだことをテーマ別に展示し、UNICEF 葉書販売、募金活動を通して、私たちが今出来ることを発信する	展示は、 (1) 世界の衣装と結婚式 (2) 食に関する問題 (3) 水に関する問題 (4) ベトナム研修参加生徒による発表 (5) カンボジアについてのミニワークショップ (6) UNICEF の活動について (7) UNICEF 葉書販売、募金	(1) JICA 横浜から借用 (2)、(3) ポスター等 (4) 写真 (5) UNICEF よりポスター、布製の教科書等借用 (6) ポスター等 (7) UNICEF 葉書  *使用言語: 日本語、英語
13	海外協力の現場から ねらい: アフガニスタンでの医療支援について学ぶ	(1) アフガニスタンで医療支援をしている看護師の方から、現状と問題点、支援の必要性について学ぶ (2) 質疑応答	特になし
14	カンボジアの仲間たち ねらい: カンボジアについて学び、同じ地球に生きる仲間として感じる	(1) Win&Win「対立と協力」についての復習 (2) フォトランゲージ 自分と共通点がある写真を選ぶ (3) 写真についての説明を発表 (4) どのような援助が必要か、グループ毎に討議し発表(ダイヤモンドランキング) (5) 物ランゲージ 自分が気になるものを選び、理由を発表(カンボジアで購入してきたものの、ほとんどがカンボジアでは製造	カンボジアで撮影してきた写真、購入してきた品、カンボジアで高校生に書いてもらった手紙の返事等  *使用言語: 英語、日本語

		されておらず、産業復興の遅れを教える) (6) カンボジアの高校生からの手紙の返事を読む (7) 感想 (8) JICAの活動についての質疑応答	
15	カンボジアについてもっと知ろう ねらい:カンボジアの高校生との手紙の交換を通して、つながりを深める	(1) カンボジアの高校生への手紙の返事を書く (2) カンボジアについて調べてきたことをそれぞれ発表する	カンボジアの生徒からの手紙 *使用言語: 英語、日本語
16	地域清掃 ねらい:今の私たちができることを探し、行動してみる	(1) 前もって、地域に清掃の周知をする (2) 清掃、挨拶活動	ゴミ袋、金ばさみ等
17	日本語を第一言語としない小中学生に学習支援をする ねらい: 今の私たちができることを探し、行動してみる	(1) 横浜市立大学で行われている日本語を第一言語としない小中学生の現状について学ぶ (2) 支援の方法について学ぶ	小中学校の問題集等、教材
18	UNICEF カード販売 ねらい:今の私たちができることを探し、行動してみる	(1) UNICEFの活動を説明する (2) UNICEF カード販売	UNICEF カード

#### 授業の詳細

1時間目: JICAへ行って、世界を知ろう

JICA 横浜へ行き、訪問授業を受けた。世界にはどのような国があるかという世界の概要から始まり、食べ物を通して(カレー)私たちがどの様に世界と繋がっているかを学び、なぜ海外援助が必要なのかを考えた。その後、約100年前の日本から世界各国への移民についての展示を見学した。日本が歩んできた近代化への道の過程には、援助を受ける側から援助をする側への立場の逆転があったことを、さまざまな活動から学んだようであった。訪問前にスリランカ料理店でカレーを食べたことが、より今回の「カレー」をテーマにした授業を効果的なものにしたように思う。異文化理解への導入として、適していたと思う。

2時間目: 世界が100人の村だったら

ロータリークラブ主催で、K-DEC(かながわ開発教育センター)による活動に参加した。アイスブレイキングゲームでは、世界の挨拶について学び、私たちの知らない世界の広がりを学んだ。その後の「世界が100人の村だったら」の活動では、身近な「コンビニエンスストア」というテーマを通して、世界の経済的な「バランス」の偏りを感じることができたようだ。生徒は、紐や紙コップを使って、地域の大きさやコンビニの数を体験し、驚いた様子であったとともに、使用された紙コップの再利用先を心配していた。

3時間目： 未来に向けて、私にできること

2時間目と同様、K-DECによる活動である。グループに分かれて、より良い社会を作るには、どのような活動が必要かを討議し、ランク付けした。他校の生徒や社会人も参加しており、生徒は、異なった視点からの議論に刺激を受けた様子であった。また、自分の意見を言葉にして発言することに臆して、慣れていない様子であった。

4時間目： Stop Human Trafficking タイ、パヤオセンターの子供たちとの交流

タイのパヤオセンターは、人身売買に巻き込まれた子供たちの救助活動と、その後の教育や職業訓練の場を提供している。タイの子供たちによる劇を通して、生徒は、同じ年頃の子供たちが困難な状況を体験してきたことに、大変驚いた様子であった。意見交換では、タイ語、英語、日本語を交えてのコミュニケーションがあまりうまくいかず、英語での表現力の必要性を感じていたようである。

5時間目： 世界の子供たちを知ろう

UNICEF ハウスで訪問授業を受けた。授業では、かつて日本が援助を受けていたことにも触れ、日本が経験してきた道であることを学んだ。また、展示では、保健衛生や紛争がどのように子供たちに影響するかを知り、英語の授業で学んだ児童労働についても、より詳しく知ることができた。授業で学んだことを振り返りながら、質問をしていた。

6時間目： カンボジアの現状と私たちにできること

カンボジアで「かものはしプロジェクト」を立ち上げ、人身売買を防ぐために、大人に職業訓練と仕事の機会を提供している、村田早耶香さんから話を聞いた。今まで学習してきたことに直接関わっている方の話は衝撃的であったとともに、あまり年の変わらない女性（異文化理解クラブのメンバーは全員女子）の行動力、生き方に強く感銘を受けた様子であった。カンボジアの現状についてのみならず、村田さんがなぜそのような活動に関わっているかにとっても興味があるようだ。

7時間目： アフリカの仲間たち

本校勤務の青年海外協力隊員OGによる授業を受けた。海外協力、援助は、どちらかがどちらかを一方的に利用するのではないこと(Win&Win)をゲームを通して学ばせ、フォトランゲージでは、協力隊員が撮影した写真と、アフリカの人々の直筆のメッセージを使用した。生徒は、実在の人々ということを知り、アフリカがとても身近に感じられたようであった。また、日本にある様々な品は、実は海外製品であることが多いことを「物ランゲージ」で実感させた。生徒は、Win&Winの考え方が印象に残ったようであった。

8時間目： カンボジアの友達を作ろう

私が、教師海外研修でカンボジアへ行くことになり、生徒にカンボジアの高校生に手紙を書くことを提案した。日本語と英語で、自己紹介形式で書き、写真を添付した。生徒はとても喜んで書いてはいたが、見知らぬ人へどのようなことを書くべきなのかを悩んでいた様子で、内容は表面的なものにとどまっていた。

9時間目： 裁判員制度について学ぼう

異文化理解クラブは、3月に横浜地方裁判所主催の「高校生裁判員甲子園」に出場し(3位)、裁判員制度についても学んでいた。カンボジアではボルボト派の裁判が始まったこともあり、他国の裁判制度と比較することとし、本校のアメリカ人英語指導助手と、アメリカの陪審員について

ディスカッション形式で学んだ。最後は、日本とアメリカの制度のどちらかがよりよいかについてミニディベートを行い、口角泡を飛ばして議論していた。自分の考えを言語化して、表現することに少し慣れてきた様子で、教室を出る際に、「楽しかった」と言っていたことが印象に残っている。

10 時間目： JICA 地球ひろばへ行って世界を知ろう

JICA 地球ひろばで、フィールドワークを行った。水をテーマに展示がされており、本校の文化祭でも、取り上げることを選んだ。展示見学の後には、青年海外協力隊員 0B による授業を受け、アフリカのケニアにおける格差と教育の問題について学んだ。昼食は、地球ひろばにあるレストランでタイ料理を食べ、その後は映画「ショコラ」を見た。日本にいながら海外について多くを体験した一日であり、生徒は、日ごろから当たり前のように使っている水に対して、異なった角度から見るようになったと言っていた。

11 時間目： 横浜国際フェスタ見学

横浜国際フェスタで、私がワークショップに参加することもあり、生徒も見学に来た。特に、様々な NGO や大学、高等学校の取り組みに驚いた様子であった。また、本校の卒業生も活動に参加していることを知り、より取り組みへの参加が身近なものに感じられたようである。私自身も、自分の卒業生が、活動している様子を目にすることができ、少しずつ活動の輪が広がっていることを感じ、うれしく思った。

12 時間目： 文化祭展示

今まで学んだことをテーマ別にまとめ展示した。クイズ形式を使うことにより、訪れる人々に直接伝える工夫をした。神奈川県からの高校生海外派遣で、ベトナムで研修を受けた生徒も、発表の場を持った。生徒は、初対面の人々への意見の伝え方なども学んだようであった。また、UNICEF 葉書販売、募金活動を通して、私たちが今出来ることも発信した。来年度への課題も見えたようで、どのような改善が必要であるか、意見を交換していた。

13 時間目： 海外協力の現場から

アフガニスタンで医療支援をしている看護師の方から、現状と問題点、支援の必要性について話を聞いた。生徒の中には、看護師として将来海外支援に参加したいと考えているものも出てきているので、とても興味深く話を聞いていた。質疑応答や意見交換の場が無かったため、振り返る機会を逸してしまった。今後は、振り返る機会を設け、生徒がより深く理解し、消化できるようにしたいと思う。

14 時間目： カンボジアの仲間たち（実践授業）

これまでの活動の一区切りであり、まとめとしての授業を行った。まずは前期に学んだ、Win&Win「対立と協力」についての復習をしたが、生徒が思いのほか良く覚えていたことに驚いた。フォトランゲージでは、自分と共通点がある、もしくは興味がある写真を選び、何の写真かを話し合った後、それぞれの写真について、準備されていた説明を発表した。その後、カンボジアにはどのような支援が必要かを、グループ毎に討議しその優先順位を発表した（ダイヤモンドランキング）。その後、私がカンボジアで購入したものの中から、自分が気になるものを選び、理由を発表した。この活動では、カンボジアで購入してきたものの、ほとんどがカンボジアでは製造されず、産業復興が遅れていることを教えた。ここまでの活動の使用言語は、英語と日本語であり、英語で自分の意見を発信する機会を設けた。英語の表現力は、伝えたい内容があることが上達への鍵であることを、様々な活動を通して、生徒に実感してほしいと思っている。カンボジア

を色々な角度から学習した後、生徒がカンボジアの高校生に書いた手紙の返事を見せた。生徒からは、歓声のようなものが上がり、興奮した様子であった。次回、返事を書くことを伝え、JICA横浜の安養寺さんへの質疑応答に移った。生徒から次々と質問が出、自分の心を開いてコミュニケーションを図ろうという姿勢が感じられ、これまでの活動を通しての生徒の成長が見られたように思った。



#### 15 時間目： カンボジアについてもっと知ろう

生徒は今、手紙の返事を書くことと、カンボジアについて興味を持ったことについて調べることに取り組んでいる。前回の手紙では、内容が自己紹介を中心に、とても表面的なものであったが、返事には、それぞれ一歩踏み込んだことを書いている。年明けに、それぞれ発表する予定である。



#### 16 時間目： 私たちができることから始めよう（地域清掃活動）# 1

これまで学んできたことを糧に、より良い社会を作るために私たちができることを、行動に移してみることにした。まずは、身近な地域社会への貢献を目標に、学校周辺の清掃活動を行った。生徒は、活動中に色々な地域社会の人々から思いがけずかけられた温かい言葉に驚き、感動していたようであった。ささやかではあるが、実際行動することで、地域社会に貢献できたという充実感を体験したようで、実施後の反省会では、「楽しかった」「温かい言葉がけが、とてもうれしかった」「行動してみることで、今まで目のいかなかったところを見るようになった」「また近々行いたい」などの感想が出た。

#### 17 時間目： 私たちができることから始めよう# 2

横浜市立大学の学生サークルが行っている日本語を第一言語としない小中学生への学習支援に、来年から参加することになった。今回は、活動についての説明を聞き、具体的にどのようなことをしたら良いのかを学んだ。教員志望の生徒もあり、自信がないといっているながらも、是非やってみないと意欲的な様子である。

#### 18 時間目： 私たちができることから始めよう（UNICEF カード販売）# 3

自分たちにできる社会貢献、国際貢献は何かを考え、UNICEF カードの販売を文化祭に引き

続き行った。実際の貢献活動も3回目となり、生徒も少しずつ慣れてきた様子である。売り上げが上がったことがうれしかったようで、来年度も活動を続けることにした。

## 成果と課題

私が初めて異文化に出会ったのは、小学校5年生で、アメリカへ行ったときである。その後も交換留学生として、アメリカへ行き、そこで、アメリカ人だけではなく、様々な文化を背景に持つ人々に出会った。帰国後も、海外の報道を耳にするたびに、アメリカで出会った友人の顔が思い浮かび、物理的には離れた国で起こっていることも、何か身近な問題のように感じるようになった。

富山県や横浜市での教員経験を通して、高校生を海外研修に引率する機会を幾度か得た。短い期間であってもその影響は多大で、その後の進路を大きく変える生徒も少なくはなかった。きっと私が幼い頃アメリカで感じたように、生徒も、外国の人々も私たちと同じように、家族を愛し、友人を大切にすると実感して帰国するからではないかと思う。

しかしながら、海外へ行く機会を得られる生徒はまだ少数で、授業や学級活動を通して、どのように世界と皆が繋がっていることを教えたらいいか、いつも悩んでいた。金沢高等学校でクラスを持ち、その生徒たちが英語や世界についてもっと一緒に勉強したいと言ってくれたとき、その思いはますます強くなった。

JICAの教師海外研修のことを知ったのは、そのようなときであった。世界と生徒を少しでも近づける何かヒントのようなものが得られないかと思い、参加した。

研修を終えての私自身の大きな収穫は、カンボジアと私の距離が縮まったことである。研修参加後の14時間目の実践授業では、今度は生徒とカンボジアの距離を縮めるため、カンボジアについての様々な活動の後、カンボジアの高校生からの返事を生徒に渡した。生徒からの授業の感想には、「本当に返事がくるとは思わなかった」「手紙を書きたい」「楽しみにしていた返事が本当に来てうれしかった」「国際交流が身近になった」「物的支援だけがすべてではないと思った」「日本語で一生懸命手紙を書いている様子が浮かんでくる」「英語がしゃべれるようになり、日本のことも勉強し、教えてあげたい」「移動図書館で働きたい」「看護師として海外へ行きたい」「カンボジアが身近になった」「漠然としていた支援のイメージが深まった」などがあつた。その中で、もっとも強く心に残ったのは英語の活動には興味があつても、国際援助にはあまり関心を示さなかつた生徒の、「手紙を書いてくれた子に会ってみたい。少しずつでもこういった勉強や活動を続けていくべきだと思った」という感想であつた。そして、授業の最後に行った、JICA 横浜の安養寺さんへの質疑では、積極的に心を開いて話しを聞こうとする姿勢が見られ、生徒の成長を目の当たりにすることができた。

実践授業後は、英語表現の活動や、引き続き国際問題の理解を深める学習を行うとともに、新たに、今の自分たちにできることを考え、実際の行動に移す活動が加わつた。これまでのところ、地域の清掃活動、UNICEF カードの販売、日本語を第一言語としない小中学生への学習支援を行っている。特に、日本語を第一言語としない小中学生への学習支援活動は、生徒も強い意欲を示しており、継続的に行う予定であり、今後の活動の柱のひとつとなると思う。また、部員の中には、神奈川県高校生海外研修に参加し、ベトナムへ行ってきた生徒もおり、少しずつではあるが、活動の広がりを感じている。

国際理解教育は、様々な困難な問題を抱える国々の状況を学び、世界には自分たちとは異なつた暮らしをしている人々の現状に気づき、自分たちに何ができるかを考え、実際に行動する力を育成することがその活動の大きな柱であると考えられる。そのためには、まず、世界で起きている色々な問題は、特定の国だけが問題に取り組むのではなく、私たち一人ひとりが自分の問題であると捉え、取り組んでいかなければならない問題であるということを実感することが重要であると考



える。ますますボーダーレス化していく国際社会において、このような姿勢を持つことは、特に若い世代には必須であり、多感な小中高校時代における学習の機会の提供は、教員の使命であると考えらる。

今回、今までの活動をまとめる機会を与えていただき、自分自身、活動を振り返ることにより、多くのことに気づき、反省し、「学ぶこと、行動すること、持続すること」という来年への課題が見えてきた。また、生徒のこの一年間の成長には、目を見張るものがあり、それが最もうれしい発見であった。また、生徒の存在なしでは、私自身の研修参加もなく、生徒から多くを学ばせてもらったことに感謝している。

研修中に K-DEC ( かながわ開発教育センター ) の木下さんがおっしゃっていた「話を聞いてくれと言っても、なかなか聞いてもらえない。聞いてもらう工夫が必要だ。」という言葉が強く印象に残っている。どのような工夫をするかを考えることは、教師としての楽しみであり、うまくいくかどうかは、腕の見せ所である。今回の研修にはその工夫の答えはないが、ヒントがたくさんあり、それをどのように生徒に還元していくか、どのように生徒と世界をつなげたらよいか、これからも取り組んでいきたい。また、そのためにも、私自身、生徒のロールモデルとなれるよう、今後も世界と自分をつなげる努力を「楽しみながら」していきたいと思う。

#### 参考資料

- ・ 「わたし8歳、カカオ畑で働きつけて」 児童労働を考えるNGO=ACE 合同出版
- ・ 「世界を知れば自分が見える」 高校生の国際理解集材班 数研出版
- ・ 「欧米人が沈黙するとき」 直塚玲子 大修館書店
- ・ 「Polite Fictions」 N. Sakamoto, R. Naotsuka 金星堂
- ・ 「Survival Kit for Overseas Living」 L.R. Kohls Intercultural Press
- ・ 「Beyond Language」 D. R. Levine, M. B. Adelman Prentice-Hall
- ・ 「The Culture Puzzle」 D. R. Levine, J. Baxter, P. McNulty Prentice-Hall
- ・ 「ESL Teacher s Holiday Activities Kit」 E. Claire The Center for Applied Research in Education

